

2025/2/9 デジタルアーカイブin岐阜

『デジタル時代のアーカイブ系譜学』 ～アーカイブの概念史～

東北大学史料館 加藤諭

satoshi.kato.d4@tohoku.ac.jp

はじめに

東北大学史料館教授

加藤諭



略歴

1978年宮城県仙台市生まれ

1997年～東北大学文学部入学→日本史研究室へ

歴史学との出会い

2002年～同文学研究科に進学

一貫して**百貨店史**を研究

2004年～東北大学百年史編纂事業に従事

大学史との出会い

2011年～東北大学史料館公文書室 教育研究支援者

アーカイブズ学との出会い

2015年～東京大学文書館 特任助教

2017年～東北大学史料館 准教授

学内デジタルアーカイブの取り組み

2020年～東北大学東北アジア研究センター兼務

2021年～東北大学大学院文学研究科兼務

2022年～総長特別補佐(広報・記念事業担当)

※2024～(社会連携・校友会担当)

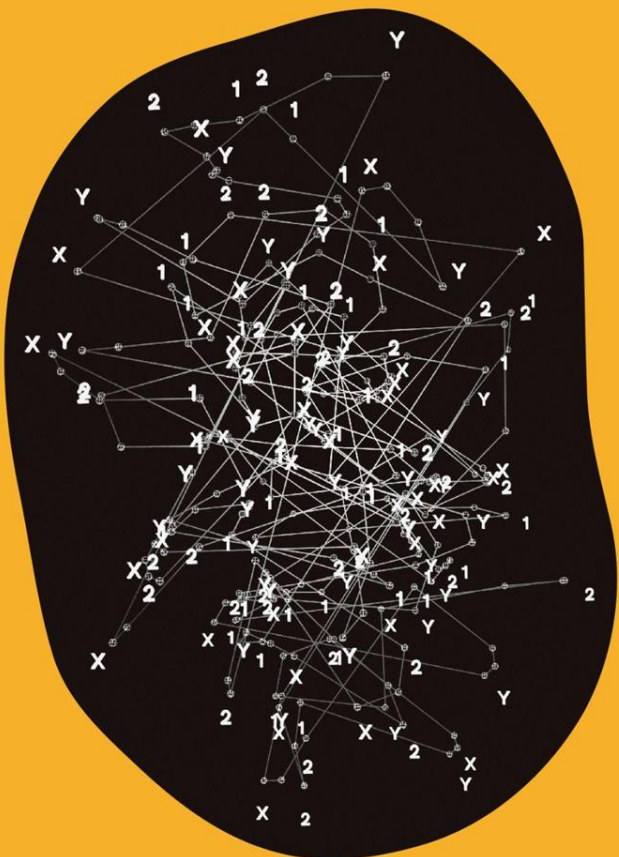
2022年～東北大学ヨッタインフォマティクス研究センター

2023年～東北大学統合日本学センター副センター長(兼務)

2024年～現職

デジタル時代の アーカイブ系譜学

柳与志夫 監修
加藤諭・宮本隆史 編



みすず書房

柳与志夫監修／加藤諭・宮本隆史編『デジタル時代のアーカイブ系譜学』みすず書房、2022年12月1日刊行予定

序章 デジタル時代のアーカイブの諸系譜をたどるために（加藤諭・宮本隆史）

第一部 アーカイブの系譜を解きほぐす

- 1 アーカイブの概念史（加藤諭）
- 2 アーカイブの技術史（大向一輝）
- 3 博物館・図書館・文書館から見たアーカイブ史（嘉村哲郎・加藤諭・福島幸宏）

第二部 多様なアーカイブの文脈を紐解く

- 4 自治体史とデジタルアーカイブ（福島幸宏）
- 5 研究者から立ちあがるアーカイブ（宮本隆史・加藤諭・福島幸宏）
- 6 文化活動の側面を持つアーカイブ（鈴木親彦・谷川智洋・加藤謙信）

第三部 アーカイブをメディアとして読み解く

- 7 複製技術とアーカイブ（阿部卓也）
- 8 デジタルテキストのメディア特性（中村覚・宮本隆史）
- 9 コミュニティの想像とアーカイブ（稲葉あや香・宮本隆史）

終章 まとめと展望（加藤諭・宮本隆史）

本日の流れ

- はじめに
- 1、「アーカイブ」の系譜を論じるとは何をすることか
- 2、デジタル時代のアーカイブはどう議論されてきたか
- 3、技術論的文脈
- 4、日本におけるデジタルアーカイブ政策の流れ

1、「アーカイブ」の系譜を論じるとは
何をすることか

(1) 現状認識

デジタル化されたコンテンツの雪崩

デジタル化されたテキスト、音声、画像などの「コンテンツ」の急増

➡これを受けた「アーカイブ」の前景化によってつぎの事態が生じた

- アーカイブと呼ばれる制度や営みの浸透
- 多くの人々が「アーカイブ」について語るようになった
- 「アーカイブ」が社会に与える効果の変化
- 「アーカイブ」に関わるプレイヤーと概念理解の多様化

アーカイブと呼ばれる制度や営みの浸透

生活のさまざまな局面で「アーカイブ」が語られるようになってきている

- 二〇〇〇年からNHKでは「NHKアーカイブス」の放送を開始
- インスタグラムなどのSNSや、動画共有プラットフォームのユーチューブなどにもアーカイブ機能
- 日本のNPO法人においてもアーカイブに関する名称を付す組織の広がり

多くの人々が「アーカイブ」について語るようになった

アーカイブズ学における用法：「個人または組織がその活動の中で作成または収受し蓄積した記録のうち、組織運営上、研究上、その他さまざまな利用価値のゆえに永続的に保存されるもの」としてのアーカイブズや、そのための専門機関、施設としてのアーカイブズ（文書館、公文書館、史料館等）

➡ デジタル・データを含む情報の集積を指すものとしての用法が増えている。

- 「アーカイブ」の指示する対象として想定されるものが大きく変化
- 多くの人々が「アーカイブ」について語るようになり、その語り
のなかで「アーカイブ」の意味内容が多様化

「アーカイブ」が社会に与える効果の変化

情報のネットワーク化：「アーカイブ」の様態だけでなく、何を「アーカイブ」ととらえるのかということも、アナログメディア時代とは大きく変わった

- ソーシャルメディア上でのコミュニケーション
- 情報の作られ方・読まれ方の変化

➡アーカイブなるものは、新たなかたちで人々のメディア体験に影響を与えるようになった

★「アーカイブ」は社会を構成する新たな装置として立ち現れつつある。

「アーカイブ」に関わるプレイヤーと概念理解の多様化

日本では公文書管理のための制度化が進んだ時期と、デジタル化されたコンテンツの雪崩が顕著になった時期は、ともに二〇〇〇年代に入ってから

- 文書管理のための制度としての文書館の確立を目指すアーカイブズ学の論者たちと、デジタル化されたコンテンツの活用に関心を寄せる論者たちは重なり合いつつも同時期に議論を展開
- アーカイブについての共通の理解が形成されたというよりは、むしろ概念やその歴史についての理解が多様であることが明確化した⇒デジタルアーカイブの定義については議論がいまでも進行形

(2) 「アーカイブ」の系譜を論じるとは何をすることか

アーカイブなるものの概念の定義を整理する試み

- アーカイブズ学：個人や組織の活動に伴って作成あるいは収受し継続的に利用する価値あるものを編成し保存した記録やその保存機関としてアーカイブズをモデル化する
➔何を保存するべきかという価値判断が伴う
- デジタルアーカイブの議論：複数のファイルをまとめてシステムやネットワーク上で利用できるようにしたものを「アーカイブ」と捉えることが多い
➔アクセシビリティの向上や永続性を担保するべきという規範が強調される

★アーカイブがいかなる規範にしたがって編成され構築されるべきかという意図を問う姿勢が共通している

アーカイブの意図は自明の前提か

作ろうと意図しないでできてしまった情報の集積が「アーカイブ」として扱われるような事例は数多くある。

e.g.) ウィキメディア・コモンズの情報の集積

- 「アーカイブ」として利用する人々はある
- 特定の誰かの意図によって作られたアーカイブとは考えにくい

情報の「集積」とは何を意味するのか

アナログ時代：

- 情報の「集積」なるものについて想像しやすかった
⇒本や書類が収蔵庫に積み重なっているイメージ

デジタル時代：

- すべての情報が潜在的に複製可能で相互に接続しうる環境において、情報が「集積」と述べることに積極的な意味があるとは思われない

「アーカイブ」の本質主義からの脱却

➡すべての情報は参照の網の目のなかに位置づけられる

- 「集積」とは情報のメディア効果だととらえられる
- その「集積」を人はさまざまな文脈で「アーカイブ」として扱う

★自らが置かれた政治的・経済的・社会的・文化的文脈のなかで、人々はなんらかの情報の「集積」を発見し、保存・利用・忘却・破壊などの「アーカイブ的」な行為を行ってきたのだと見ることが出来る。

*アーカイブなるものになんらかの「本質」があるとして、その解明ができると前提する必然性はない。

系譜学の視角

➡ではどのような歴史的な条件において、情報は「アーカイブ」として扱われてきたのか？（「アーカイブ」を本質化せずにその歴史的な形成過程を問いたい）

ミシェル・フーコーの「ニーチェ・系譜学・歴史」

- 系譜学は、ものの起源（＝本質）を明らかにしようとはしない
- 本質や真理といったものがいかに歴史的に形成されてきたかを明らかにしようとする

アーカイブの系譜学の基本的な問い

- 「アーカイブ」や「デジタルアーカイブ」の本質とされるようなものがどのような経緯を通して形成され、また現在まさに形成されつつあるか？
- 情報が「集積」として捉えられる文脈はどのようなものか？
- その「集積」をひとが「アーカイブ」として認識し行動してしまうのはどのようにしてか？
- そうしたものとしてのアーカイブと社会の諸関係とはどのようにつながっているのか？

異種混交的な「アーカイブ」の諸系譜の解明へ

アーカイブの進歩史観的な歴史像の棄却

➡なんらかのアーカイブ的な本質が自己実現する物語とは捉えない

むしろ多様で異種混交的な源流が現在の「アーカイブ」に流れ込んでいるという認識

- 小さな工夫のつぎはぎのようなものとして「アーカイブ」の歴史を捉える
- まったく異なる営為や偶発的な出来事の積み重ねが、現在のわたしたちの「アーカイブ」についての想像力を可能にしている

★そうして進化する「アーカイブ」なるものが、ますますわたしたちの日常生活の環境になりつつある

2、デジタル時代のアーカイブは
どう議論されてきたか

日本アーカイブズ学会の設立・・・2004年

月尾嘉男自身の述懐・・・デジタルアーカイブ

1990年代前半における月尾の問題関心は「新しい情報の力が国力になるという考え」が根底にあり、デジタルアーカイブの立論には情報通信政策との関係のなかで提起

1990年代のマルチメディア論がどちらかといえば技術への注目が強かったのに対し、技術に加えてコンテンツ自体を重視する立場からの立論

柳与志夫「「デジタルアーカイブ」に至る道——月尾嘉男先生インタビュー」『デジタルアーカイブ学会誌』5（4）、2021

- 結論の先取り
- 1990年代後半～2000年代前半
アーカイブズ学との関係からデジタルアーカイブを語る視点希薄
- 2000年代後半～2010年代前半
アーカイブズ学の流入・・・デジタルアーカイブの定義の読み替え
- 2010年代半ば～
東日本大震災以降のアーカイブ・・・既存のアーカイブズ学適用との乖離が進展

(1) 1990年代後半～2000年代前半におけるデジタルアーカイブの語られ方

- 1994年12月17日「世界の文化を未来に継承するデジタルアーカイブ国際会議」
平山郁夫東京芸術大学長の基調講演「文化財保護とマルチメディア」
世界文化財赤十字構想→マルチメディアを使った文化保存の国際的協力の可能性
「デジタルアーカイブ」・・・世界の文化をデジタル映像化し、情報サービスとして活用
- 1995年2月25-26日 G7 特別報告
- 世界の文化遺産への開かれたマルチメディア・アクセスに向けて：博物館と美術館
- 「われわれは、博物館が持つ伝統的かつ重要な特質に、文化振興の文書センターという役割を新たに加えるという構想を推進すべきである。これらの博物館に最新の情報コミュニケーションのテクノロジーを適切に導入することで、あらゆるデーター知識を支援し、文化資産の保存に役立つ画像と一般的または特別な文献ーを文化資産のもとに集積し、きわめて重要なマルチメディア・データバンクを構築することが可能となる」

<https://cordis.europa.eu/programme/id/IS-G7-HERITAGE-C>

- デジタルアーカイブ推進協議会・・・1996年4月「デジタルアーカイブ構想」
 - ・・・文化庁、通商産業省、自治省の三省庁の支援

- 構想の定義

「有形・無形の文化資産をデジタル情報の形で記録し、その情報をデータベース化して保管し、随時閲覧、鑑賞、情報ネットワークを利用して情報発信する」

- デジタルアーカイブの目的

- (1) 文化資産を記録制度が高く再現性にすぐれたデジタル情報の形で記録
- (2) デジタル情報をマルチメディア・データベース化して正しく保管し随時閲覧
- (3) マルチメディア・データベースを高度通信網（インターネット等）を利用して、広く情報を受発信
- (4) 内外各地域でのデジタル・アーカイブ事業の相互連携と協力、国際貢献

1996年「デジタルアーカイブ推進協議会」発足

➡文化学術振興、産業振興、地域振興などが相乗りしていく中で、急速に用語として流通

⇔その定義もさまざまに解釈され拡散

- 博物館分野～青柳正規らがデジタルミュージアムの文脈からデジタルアーカイブを咀嚼
- 図書館分野～長尾真らが電子図書館、デジタルライブラリー文脈上にデジタルアーカイブ

- 武村光裕（2003年）・・・デジタル・アーカイヴ≠デジタル公文書館

「記録と記憶という背景から記憶の支持体として成立した現代の最先端技術の集積から来る大きな概念」
デジタル・ミュージアムやデジタル・ライブラリといった既存発展型の概念を統合、再編
→同時代的なデジタルアーカイブにおいても、いわゆる「アーカイブズ」を意識した定義は見られない

- 月尾嘉男（2004年）

「人間が発展してきた原因は多数あるが、そのひとつが事実や思考を記録して、それらを時間を経由して後世の人間が参照できるようにし、また、伝達手段を工夫して他所の空間からでも参照できるようにしたことである。その情報が蓄積された施設がアーカイブと命名」

- 笠羽晴夫（2004年）

- ①アーカイブのデジタル化、②デジタル技術を活用した収蔵物のアーカイブ化、③散在する対象物そのもののかわりにそのデジタルデータを対象としてアーカイブとしたもの

- 谷口知司（2006年）

①デジタル化された集積物（所）、②デジタル化された古記録、③デジタル化された記録保管所を意味

(2) 2000年代後半におけるデジタルアーカイブ概念とアーカイブズ学の視座

- 長期保存への焦点→既存のアーカイブズ学への視座の高まり
- 先行研究史においてデジタルアーカイブと長期保存が正面から議論されるようになるのは、2000年代半ば以降（論文タイトルにデジタルアーカイブ+長期保存）
- アーカイブズ学（真正性、信頼性、完全性、利用性に関する記録管理の国際標準ISO15489）
- 文書館分野～2000年代以降、デジタルアーカイブ論をいかに接合していくかが議論

- 赤間亮

「デジタルアーカイブの動きが停滞しているように見える大きな理由に、デジタルファイルに対する保存性に関する「両極端の評価」」

デジタルデータは「劣化しない」という神話→「永久保存」から始まった日本のデジタルアーカイブの運動に対する、現場の「物品」を直接扱う学芸員からの疑義

- 研谷紀夫・馬場章

リアルアーカイブとデジタルアーカイブの区分概念

リアルアーカイブ・・・保存を重視、デジタルアーカイブ・・・利用を重視

- 後藤真

「「デジタルアーカイブ」の語の中には、少なくともアーカイブズ学・史料学・歴史学に関わる人々が定義するような「アーカイブ」が対象とされてこなかった」

アーカイブズの「デジタル化」≠デジタルアーカイブ

- 森本祥子

記録が「作成・蓄積された経緯をふまえて資料の整理をし、利用者に提供すること」

→「伝統的アーカイブズとデジタルアーカイブとではアーカイブ（ズ）概念が異なる」

- ◆MLA連携の潮流・・・2000年代半ば以降（論文タイトルにMLA連携）

- 松岡資明

「MLA」という言葉が最近、博物館や図書館の関係者の間で頻繁に使われるようになった。この言葉、ミュージアム、ライブラリー、アーカイブズ（記録資料やそれを収蔵する施設）の頭文字を寄せ集めた言葉なのである。その三つをなぜ、合わせて呼ぶようになったかといえば、電子化によってそれぞれを分け隔ててきた垣根が低くなり、融合する方向へと向かい始めているからだ」

- 国が共営するJDAAの解散（2005年6月）→MLA関係諸機関の予算でのDA構築

(3) 、 2010年代以降～
東日本大震災を経たデジタルアーカイブ概念の拡張

- 2011年2月、「知のデジタルアーカイブに関する研究会」
・・・総務省を中心とした研究会

杉本重雄

デジタル化のプロセスの有無にかかわらずデジタルリソースをより一般化してとらえ、MLAのサービスの基盤であるデジタルコレクションの長期提供に軸足

⇔情報通信白書2003年版との違い・・・博物館、美術館、公文書館や図書館の収蔵品をはじめ有形・無形の文化資源等をデジタル化して保存等を行うシステムをいう

- 2012年3月「知のデジタルアーカイブ～社会の知識インフラの拡充に向けて～」提言
東日本大震災の記録を伝承し、災害対策に役立てるためのアーカイブの構築の重要性

- 柴山明寛 . . . 震災・災害アーカイブ (2011~2012年)
- Yahoo!Japan 「東日本大震災 写真保存プロジェクト」
- Google 「未来へのキオク」
- せんだいメディアテーク 「3がつ11にちをわすれないためにセンター」
- 東北大学 「みちのく震録伝」
- 日本放送協会 「NHK東日本大震災アーカイブス」
- 国立国会図書館 「東日本大震災アーカイブ (ひなぎく)」

- 今村文彦

震災・災害デジタルアーカイブ

→スマートフォンの普及+Webサイトの何らかのプラットフォーム

→被災現場の写真や動画の記録を容易に収集、社会に公開

「客観的な記録として残すだけでなく、記憶を記録としても残し、それをもう一度記憶に変換する機能が必要」

- 渡邊英徳

ツリー構造の弱点⇔多元的デジタルアーカイブズ（①予備知識を持たない人でも資料を探索しやすいこと、②資料同士のつながりをつかみやすいこと）

現用と非現用の境界領域のあいまいさ

任意に消せることと永続性のあいまいさ・・・伝統的なアーカイブズ学との非親和性

- デジタルアーカイブ・ベーシックス2において、アーキビストによる執筆無し

→震災における既存のアーカイブズ学の有効性、問い直し

- デジタルアーカイブの共通理解の最大公約数をどこに設定するかが、あらたな論点

- 古賀崇

「アーカイブ」を基盤として、デジタル形式で資料を作成・構築・発信するしくみ
図書館・文書館・博物館等のさまざまな資料「最大公約数」

- 永崎研宣

「デジタルアーカイブ」という和製概念はMALUIをはじめとする各種文化関連機関（の資料）をデジタル情報基盤で連携させるための枠組み

- 柳与志夫

①デジタルコレクションの形成→MLA的コレクション+収集方針がなくても「集まってくるコンテンツ」、②時間・空間を越えた利用、③ネットワーク性、④公共的な利用可能性、⑤コンテンツの信頼性と改変の容易さの両立≠アーカイブズ学の真正性の適用、⑥コンテンツの半永久的保存、⑦維持可能な組織の存在、⑧戦略性→仕組み、枠組みを制度化する「政策」への視野の強調

◆従来からのデジタルアーカイブ定義も引き続き連続・・・文化遺産、歴史遺産からの視座

- 高島秀之

遺跡、文化財、文書資料などの歴史的遺産や、世界遺産に指定されている自然環境などを、電子媒体での映像、文書に記録し、データベースに作り上げること

- 八村広三郎

「さまざまな歴史・文化・芸術に関わる資料をデジタル化してデータとして記録・保存し将来へ継承するとともに、これらのデータを公開し共同で利用して研究を行い、また場合によっては産業などへの応用を行うことを示すもの」

◆デジタル技術とアーカイブズ学の向き合い方の模索（2010年代後半）

- 現実的なアーカイブズ学適用の実践、大規模予算に拠らないコスト面での議論
- 入澤道場の活動
- 編成・管理・記述の適用→オープンソース・ソフトウェアでの実験（AtoM）
- 国立公文書館が提供するデジタルアーカイブ・システムの標準仕様書→スリムモデルの提起

- 博物館 (Museum)、図書館 (Library)、文書館 (Archives) 各分野でデジタルアーカイブという用語が浸透
 - ➔ デジタルアーカイブ論はMLA連携論との結びつき
- 国などが指定する文化財を中心にデジタル化を進めてきた優品主義への内省
 - ➔ 市場性、非市場性を超えた、より広義な定義が求められていくように
- 東日本大震災やコロナウイルス感染症の流行、ウクライナ問題など震災、疫災、戦災といった記憶などの問題
 - ➔ 記憶に関するコミュニティの形成や継承等の議論デジタルアーカイブ論が射程を広げる素地に

デジタルアーカイブの定義を哲学的、思想的に読み解いていく試み

- 月尾嘉男

デジタルアーカイブにおけるアーカイブの本質を古代ギリシャ時代のアレクサンドリア図書館に求める

- 根本彰

図書館の思想を突き詰めると「利用可能な知の蓄積」としてのアーカイブに至る

➔思想分析の重要性を指摘

- 吉見俊哉

公的な記録だけでなく、「電子的な記録のすべて、さらには語り継がれる記憶の数々、
そして非常に多様な人々の振舞いや舞臺の記録、さらには語り継がれる記憶の数々、
それが既にデジタルアーカイブに含んでいられる」と提起

デジタルアーカイブ論

- 政策論から始まって、博物館、図書館、文書館などの分野に広がり、それぞれの扱う標本、図書、文書記録等のとらえ方を架橋し、深化させていく射程を帯びて議論されるように
- さらにはデジタル社会における知の蓄積や記憶や記録はどうあるべきかについての、技術論、メディア論や情報や知識に関する思想的議論なども進められている状況

3、技術論的文脈

技術論的文脈



Sir Tim Berners-Lee

[https://commons.wikimedia.org/wiki/
File:Tim_Berners-Lee.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Tim_Berners-Lee.jpg)

● WebとURI

URI(Uniform Resource Identifier) 1989~

- グローバルな識別
 - インターネット上のサーバの識別 + サーバ上の情報の識別
 - <https://digitalarchivejapan.org/kenkyutaik/ai/7th/satellite/>
- サービスへの指示
 - パラメータを含むURIを通じたアクセス
 - <https://www.google.com/search?q=検索キーワード>
 - アクセス時に動的に情報を生成する

V-Mail (1942-)

The print advertisement explained how Kodak provided the key equipment used to reduce V-Mail to 16 mm microfilm for speedy air transport.
 図版出典：“Victory Mail”. The Smithsonian’s National Postal Museum. 2011-07-06. <https://postalmuseum.si.edu/exhibition/victory-mail>, (参照 2021-02-25).



スローファイア（酸性紙問題）とマイクロフィルム（1980年代末）

図書館と資料保存：酸性紙問題からの10年の歩み

安江明夫 [ほか]編著

詳細情報
タイトル: 図書館と資料保存：酸性紙問題からの10年の歩み
著者: 安江明夫 [ほか]編著
著者標目: 安江, 明夫, 1945-2021
シリーズ名: 雄松堂ライブラリー・リサーチ・シリーズ: 1
出版地 (国名コード): JP
出版地: 東京
出版社: 雄松堂出版
出版年月日等: 1995.1
大きさ, 容量等: 453p; 22cm
注記: 参考文献: p443~453
ISBN: 4841901493
価格: 4000円 (税込)
JP番号: 95070450

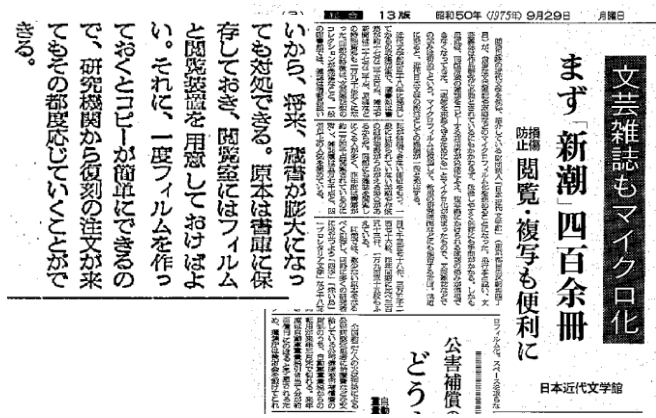
↓吉岡千里ほか. 国立大学図書館における酸性紙劣化の実態調査について. 大学図書館研究. 1990, 36, p. 12-20.

早大蔵書マイ
 早稲田大学(東京
 西原春夫総長)は二
 同大図書館所蔵の明
 文約六万点をマイ
 に撮影して保存す
 資料マイクロ化事業
 発表した。酸性紙で
 蔵書が紙の劣化でホ
 なるための対策。国
 書館がすでにマイク
 めているが、私大独
 するのは初めて。

↓毎日新聞1988年5月28日
 東京 夕刊 p.10

←安江明夫ほか編著. 図書館と資料保存：酸性紙問題からの10年のあゆみ. 雄松堂出版, 1995

原本所有の困難（1970年代-）と、収集の概念の変容 あるいはマイクロによる集書と、検索や利活用



1950年頃、文書保存専用技術としてマイクロフィルムが日本に。原本を保持しない前提での資料収集の増加などアーカイブの概念も変化。マイクロは、保存だけでなく、利活用や検索性の技術として語られる。酸性紙問題の解決策→マイクロ化

出典：阿部卓也「アーカイブをメディアとして読み解く」第7回研究大会サテライト企画セッション1.デジタル時代のアーカイブの系譜学 (2022/11/13)

- URIの永続性
 - URIとコンテンツの対応関係を長期的に維持する
 - 外部からの参照・リンクの唯一の手段
- 永続性の実現手段
 - リダイレクト
 - ウェブサーバの設定によって指定したURIに自動転送する
 - CiNii Articles: <https://ci.nii.ac.jp/naid/130005097598>
 - CiNii Research: <https://cir.nii.ac.jp/crid/1390001205360520576>
 - Permalink [2000~](#)
 - コンテンツ管理システムの導入によるURIの維持とコンテンツの固定
 - PIDs (Persistent IDs) [2010~](#)
 - 第三者機関との連携によるURIの維持
 - DOI (Digital Object Identifier)
 - J-STAGE: https://www.jstage.jst.go.jp/article/bplus/9/2/9_70/_article/-char/ja/
 - DOI: <https://doi.org/10.1587/bplus.9.70>

URIとデジタルアーカイブ

- IIF (International Image Interoperability Framework) [2011~](#)
 - URIの書式と画像処理のルールを標準化
 - サイズ・向き・部分画像の切り出し
 - 動的な画像の生成
 - 源氏物語東大本
 - https://iiif.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/iiif/genji/TIFF/A00_6587/01/01_0004.tif/full/500,500/0/default.jpg
 - 校異源氏物語 (国立国会図書館)
 - <https://www.dl.ndl.go.jp/api/iiif/3437686/R0000022/full/full/0/default.jpg>
 - [顔貌コレクションでの活用例](#) (人文学オープンデータ共同利用センター)
 - https://iiif.lib.keio.ac.jp/iipsrv/NRE/110X-315-1/tif/1_005.tif/4275,995,132,170/!200,200/0/default.jpg

4、日本におけるデジタルアーカイブ政策の流れ

日本におけるデジタルアーカイブ政策の流れ

1990年代前半

日本では国レベルの施策として、複数の省庁でハイビジョン技術の活用法が検討

→マルチメディアをキーワードにしたインフラ基盤整備が模索

- ・文化庁による「文化財情報システム・美術情報システム」整備事業
- ・自治省による「ハイビジョン・ミュージアム構想」
- ・通商産業省による「ハイビジョン・コミュニティ構想」
- ・郵政省の「ハイビジョン・シティ構想」

これらはハイビジョン技術をもとにした情報通信政策、とりわけインフラ基盤整備に重点が置かれていたが、月尾嘉男を中心として、コンテンツ重視の政策をより進めるために、ここでデジタルアーカイブという用語が提起されるようになる。

- 1996年、そうした潮流を受けて、文化庁、通商産業省、自治省の三省庁および、産業界の支援により「デジタルアーカイブ推進協議会」(J D A A)が発足
 - ⇔ J D A A がデジタルアーカイブの推進活動を展開していく一方で、自治省によるハイビジョン・ミュージアム構想を引き継いだ「デジタル・ミュージアム構想」など、各省庁間でも独自の施策も行なわれていくことに
- 2000年、内閣府に「高度情報通信ネットワーク社会推進戦略本部」(I T 戦略本部)が設置
 - ➔ 世界最先端のI T 国家を目指すため2001年「e — J a p a n 戦略」がまとめられ、I T 化、デジタル化の推進が企図されていくことに
- I T 戦略本部は2003年に「e — J a p a n 戦略II」を策定したのちも、2006年の「I T 新改革戦略」、2009年の「e — J a p a n 戦略2015」など、政策の旗振り役を担っていく

1990年代後半から2000年代・・・図書館、博物館、文書館

様々なデジタルコンテンツを提供していく動きのなかで「デジタルアーカイブ」名称も折々用いられながら発信

- 2001年、国立公文書館、外務省外交史料館、防衛省防衛研究所から提供を受け「アジア歴史資料センター」が開設
- 2002年、国立国会図書館が「近代デジタルライブラリー」を開始、
- 2005年、「国立公文書館デジタルアーカイブ」の運用開始
- 2005年、全国自然史系博物館の標本情報を検索できる「S — n e t」
- 2008年、人間文化研究機構の「n i f I N T」、文化庁の「文化遺産オンライン」が公開

日本で進展していったデジタルアーカイブのコンテンツは、国レベルでは主として国立の博物館、図書館、公文書館を中心に蓄積されていった、一方で徐々に知的財産政策との結びつき

➡デジタルアーカイブ政策は、2010年代以降、国のIT本部から「知的財産戦略本部」が担い手

2003年に知的財産立国を目指して設置された知的財産戦略本部は2013年に新たに知的財産政策ビジョンをまとめ、このビジョンにおいてデジタルアーカイブの重要性を指摘することに

- 2013年、知的財産戦略本部には、アーカイブに関するタスクフォースが設置
- 2015年、関係省庁等連絡会・実務者協議会

➡2017年、関係機関の取り組みの方向性に関する報告書「我が国におけるデジタルアーカイブ推進の方向性」、およびアーカイブ機関等を対象としたガイドライン「デジタルアーカイブの構築・共有・活用ガイドライン」が公表

- 2017年、「デジタルアーカイブジャパン推進委員会」及び「実務者検討委員会」が設置

➡保有コンテンツのデジタル化・活用の円滑化のための施策として、文化資源に関するデジタルアーカイブの分野横断型統合ポータル必要性が提起され、ジャパンサーチの構築が行程に位置づけられるように

- 2020年、ジャパンサーチの正式版が公開

この間これらの委員会、ワーキンググループの事務局は一貫して、「内閣官房知的財産戦略推進事務局」

- 国レベルでのデジタルアーカイブ政策

1990年代における情報通信に関わる諸官庁の取り組みから、21世紀に入ると内閣府における総合的なIT戦略の一環となり、知的財産戦略本部のもとで推進されることに

デジタルコンテンツの拡充、デジタル情報資源のオープン化および利活用のための基盤整備、デジタルアーカイブ構築および連携を推進する仕組みづくり、分野横断統合ポータルサイトの構築、つなぎ役の支援、アーカイブ機関の人材教育支援などが2020年代の課題として議論されている状況

おわりに

- 現在に至るデジタルアーカイブの系譜

単線ではなく、その概念や定義に関わる立論の背景に複数の源流

それらが合流しあるいは支流を形成することによって現在のデジタルアーカイブなるものが包含する中身が形成

- その系譜を歴史的・メディア論的に解き明かす試み

複数の源流からなるデジタルアーカイブ概念の系譜を可視化させ、これからのデジタルアーカイブ構築と活用に向けての共通理解を形成